

10 月 12 日 (土) 【記念講演】

Sábado, 12 de octubre 【Conferencia plenaria】

¿Cómo se es un buen profesor de español como lengua extranjera?

Jesús Fernández González
Universidad de Salamanca

La figura del profesor es vital importancia en cualquier proceso de aprendizaje y muy especialmente en el de lenguas extranjeras. En la presente charla se esbozará un retrato robot del profesor de ELE a partir de los tres ámbitos en los que se desarrolla su labor: 1) el profesor a solas, en el que se abordarán aspectos básicos de la formación lingüística y pedagógica de un profesor de ELE; 2) el profesor en el aula, en el que se analizarán los distintos papeles que puede desempeñar el profesor en la dinámica que establece con sus estudiantes; y 3) el profesor como alumno, en el que, desde el concepto de la formación permanente, se revisarán algunas estrategias para progresar como docente.

10 月 12 日 (土) 【言語】

Sábado, 12 de octubre 【Lingüística】

スペイン語学習者のスペイン語生成におけるアクセントの特徴

—強勢アクセントと長音との代替現象に焦点を当てて—

Característica del acento en la generativa del español por los aprendices japoneses

: Enfocando el fenómeno alternativo del acento de intensidad del japonés

徳吉 敬介 (Keisuke TOKUYOSHI)

本研究は、日本語を母語とするスペイン語学習者(以下「学習者」とする)を対象に“Palabras Llanas”を中心とした語を調査語とし、スペイン語の強勢アクセントと日本語の長音との代替現象に焦点を当て、考察したものである。

これまで、スペイン語学習者がスペイン語の子音連続をどのように知覚しているかを扱った研究は松本(2011、2014)などである。学習者は、スペイン語音声を日本語の個別音と代替して聴取する傾向が強いとされている。そこで、筆者は学習者がスペイン語生成においてカタカナ読みで発音するのではないかと予想し、調査を行った(2018)。その結果、母音の挿入、拍リズムへの変化、カタカナ語アクセント規則が連鎖することでカタカナ読みが誘発されることがわかった。また、学習者は、“Palabras Llanas”のアクセント生成において、強勢アクセントを長音で代用している可能性があり、更なる調査の必要性を感じた。

本研究では、学習者がカタカナ表記した語と“Palabras Llanas”において、共通の音声的認識が働いているのであれば、アクセント位置で長音と強勢を弁別していないという仮説をもとに、調査を行った。その結果、次の3点が明らかになった。

- (1) 学習者はアクセントがどこにあるかという意識はあるものの、強弱と高低の弁別まではしていない。
- (2) “Palabras Llanas”のアクセント位置は、カタカナ表記で後ろから3拍目にあたることから、カタカナ語アクセントの-3型アクセント規則が影響している。
- (3) カタカナ読みの影響が日本語の母語干渉として起き、アクセント位置で強勢アクセントを長母音で代用して発音する。

上記の結果には、強勢と長音を弁別せずにアクセントを長母音で代用していることから日本語の母語干渉が関係している。母音は子音と比較して調音器官の狭めが弱いいため、緊張度が低い音と考えられる。すなわち、学習者によるスペイン語生成は、緊張から弛緩へ変化させるといった母語干渉ならびに生理的な問題の影響を受けやすい。

10 月 12 日 (土) 【言語】

Sábado, 12 de octubre 【Lingüística】

Relativas de infinitivo introducidas por preposiciones
前置詞による不定詞の關係詞的用法

下田 幸男 (Yukio SHIMODA)

スペイン語の關係節は que によって導かれ、その多くが定形節として現れる。しかし定形節ではなく不定詞が現れることも頻繁に確認されている。

(1) Tengo aún varios libros que leer.

que に導かれる不定詞の研究は数多くの先行研究が存在する。その多くは先行詞の不定性や時勢の制限、非実現性などの概念によって説明されており、構文としての機能やそのヴァリエーションはほぼ解明されていると言っているだろう。

そんな中で que ではなく前置詞によって導かれる不定詞の關係詞的用法も存在する。

(2) Tengo aún varios libros por leer.

(3) Tengo aún varios libros para leer.

(4) Tengo aún varios libros sin leer.

que と交換可能なこれらの前置詞によって表される文の意味はそれぞれ微妙に異なっている。que の多くは modal な觀念を含むとされ「～すべき」「～だろう」など意味する。por には「まだこれから読もうとする」、para は「(何らかの目的のために) 読む必要のある」、sin は「まだ読んでいない」をそれぞれ意味している。

このような意味的な違いが、使われる動詞にも影響を与えている。que は tener que, hay que など使われることから tener, hay と使われるケースが多いが(1)、(2)～(4)の場合には faltar, quedar などの動詞とともに使われることが多い。ほかにも hacer falta, necesitar, querer, buscar などの動詞もあり、実際にいくつかの刺激文 (que/por/para/sin を空所に入れる) を使ってネイティブスピーカーにインフォーマントチェックを行ったが、すべてで置き換え可能というわけではなかった。

(5) Necesito tierra que pisar.

(6) ?Necesito tierra por pisar.

さらにメキシコ人とスペイン人で異なった結果になったものもあり、まだ精査が必要である。

さらに、以下のような前置詞とともに使われる關係詞の場合、que は OK であるが、前置詞は使うことができない。

(7) Busco un abogado en el que confiar.

(8) *Busco un abogado en por confiar.

本発表はこのような前置詞による不定詞の關係詞的用法をコーパスによるデータやインフォーマントチェックにより que との違いに焦点を当てて分析を試みる。

10 月 12 日 (土) 【言語教育】

Sábado, 12 de octubre 【Didáctica】

スペイン語圏現地の語学学校における日本人スペイン語学習者の外国語不安に関する研究
—メキシコ国立自治大学の語学学校におけるケーススタディー—

La ansiedad ante el aprendizaje de lenguas extranjeras de los aprendientes
japoneses de lengua española en centros de enseñanza de ELE en países hispanohablantes
: Un estudio de caso sobre un grupo de estudiantes en el Centro de Enseñanza Para los Extranjeros de la UNAM

和田 瞳 (Hitomi WADA)

近年スペイン語圏に留学し、現地の語学学校で学ぶ学習者も少なくない。しかし、スペイン語圏の語学学校でのスペイン教育は、日本のスペイン語教育と母語使用の可否、クラスメートの国籍、授業スタイル等の点で大きく異なる。そこで、現地では慣れない授業スタイルや欧米圏をはじめとした多国籍のクラスメートに圧倒されて不安を感じることもあるだろう。このような外国語不安は Krashen の情意フィルター仮説*によると、学習者の言語習得を妨げると言われている。

本発表は、教室内外国語不安をスペイン語圏現地の語学学校の学習者と日本でスペイン語を学ぶ学習者の両方で比較する。研究方法としては Horwitz, et al.(1986)**の *FLCAS : Foreign Language Anxiety Scale* 「外国語教室不安尺度」を使ったアンケート調査と統計を用いた量的研究を基に、補助的にインタビューを用いた質的研究を行う。そして、1) 現地でスペイン語を学ぶ学習者の不安は日本で学ぶ学習者の不安と比較して大きいか、また、2) 不安の主な要因となっている要因はそれぞれ何か、の 2 点を研究課題としてその調査結果を報告する。

*Krashen, S. D., & Terrell, T. D. (1983). *The natural approach: Language acquisition in the classroom*. San Francisco: Alemany Press.

** Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety, *The Modern Language Journal*, 70,125-132.

10 月 12 日 (土) 【文学】

Sábado, 12 de octubre 【Literatura】

「歴史」を語る人物たち—カルペンティエルの戯曲『魔女の見習い』をめぐって—

Los personajes que hablan de la Historia—acerca de *La aprendiz de bruja* de Alejo Carpentier

穂原 三佳 (Mika AKIHARA)

舞台芸術は音楽と並んでアレホ・カルペンティエル (Alejo Carpentier, 1904- 1980) の創作において、しばしば着想の源泉となってきた。例えば、『バロック協奏曲 (*Concierto barroco*, 1974)』は、ビバルディのオペラ『モテズーマ (*Motezuma*)』の台本「発見」に端を発して書かれた短編小説であり、中編小説『追跡 (*Elacoso*, 1956)』は、ハバナ大学で演劇上演中に目撃した発砲事件が執筆の動機の一つとなっている。

カルペンティエルの舞台芸術との関わりは、初期の創作活動において顕著である。1920 年代から 30 年代前半にかけては、自らバレエ台本を執筆したほか、パリ滞在中にセルバンテスの戯曲『ヌマンシア (*Numancia*)』の劇中の音楽を手がけている。

1939 年にパリを離れたカルペンティエルは、その後小説を中心とした創作に移行していくが、『ヌマンシア』上演時に知遇を得たジャン＝ルイ・バロー (Jean-Louis Barrault, 1910-1994) に乞われ、1956 年にフランス語で戯曲『魔女の見習い (*L'Apprentie Sorcière*)』を執筆する。エルナン・コルテスによるメキシコ征服をモチーフとした三幕の作品で、「魔女の見習い」とは、コルテスの「通訳」として征服者に同行した「マリンチェ (*La Malinche*)」を指す。

本発表では、シグロ・ベインティウノ社のカルペンティエル全集に収録されたカルメン・バスケス (Carmen Vázquez) によるスペイン語訳 *La aprendiz de bruja* に準拠して考察を行う。特に、この作品における時間操作と、間テクスト性に着目し、『この世の王国 (*El reino de este mundo*, 1949)』や『失われた足跡 (*Los pasos perdidos*, 1953)』、『バロック協奏曲』といった前後の小説と共通する表現上の特徴を明らかにしていく。

10 月 12 日 (土) 【文学】

Sábado, 12 de octubre 【Literatura】

黄金世紀演劇における「血の純潔」の再検討に向けて
Hacia la reivindicación de la limpieza de sangre en el teatro áureo

吉田彩子 (Saiko YOSHIDA)

スペイン黄金世紀演劇の名誉を「血の純潔」と結びつけたのはアメリコ・カストロであった。近年のスペイン演劇研究はこれを否定する傾向にあり、その論拠は、文学作品を文学外の事象に基づいて説明すべきではないという文芸批評的視点からの主張と、カストロの歴史認識に対する批判である。いっぽうでカストロ以降のコンベルソ研究によれば、時代と地域による差異こそあれ、血の純潔規約による社会的葛藤が存在したこと、この時代の「名誉」には「血の純潔」が含まれていたことが明らかになっている。演劇作品の研究において、名誉を「血の純潔」から切り離すことは妥当であろうか。

まずカストロの歴史認識に対する批判であるが、彼の研究がこの分野の先駆である以上、事実認識に修正を要する箇所が生じるのは当然であろう。カストロへの批判はさておき、「血の純潔」問題について近年の研究成果を取り入れることは可能と思われるが、そうならないのはなぜか。カストロの学説に対する批判が実証部分にとどまらない、歴史観に関わるものだからだと推測される。具体的に何が批判の対象となっていたのかを E.Asensio の *La España imaginada de Américo Castro* (1976 年) を手がかりに考察する。

次に、名誉を主題とする作品を血の純潔に触れずに説明することは可能だろうか。また、その説明はこれまで論議されてきた名誉劇をめぐる疑問を解決するだろうか。『サラメアの村長』『名誉の医師』を扱った論文を例に検証する。

カストロ史観の否定は「血の純潔」問題の存在自体を否定することにはならない。一方で「血の純潔」に言及せずに作品を説明する試みは徒に複雑な文学的・心理的解釈に行き着く。歴史と文学の両面で、「理論」に拘泥するのではなく、作品を字義通りに、それを生み出した社会的文脈のなかで読み解く可能性を提案する。

10 月 12 日 (土) 【文学】

Sábado, 12 de octubre 【Literatura】

フリオ・リヤマサーレス作品における「ポルマ・ダム」という主題の考察
- *Distintas formas de mirar el agua* に読み解く作者の意図 -

Un estudio del tema del embalse de Porma en las obras de Julio Llamazares
--Para comprender un mensaje del autor en *Distintas formas de mirar el agua*--

松本有希子 (Yukiko MATSUMOTO)

ジャーナリストから作家に転じたフリオ・リヤマサーレス (1955—) は、スペイン社会の中心から離れた場所に生きる人々をその作品の中で描いてきた。80 年代半ばから後半にかけて相次いで発表した 2 作品、逃亡生活を経て亡命を試みたマキの物語 *Luna de lobos* (1985) や、過疎村の最後の住民を描いた *La lluvia amarilla* (1988) で作家としての地位を確立したが、その後の作家活動の中で特に繰り返し取り上げてきたテーマが「ポルマ・ダム」である。このダムは作者の創作ではなく、カステーリャ・イ・レオン州北部に現存し、2018 年に稼働から 50 年目を迎えているが、そのポルマ・ダムの建設によって廃村となった集落のひとつが作者の生まれたベガミアン村である。20 代のときに点検で水を抜いたダム底に降り立つという体験をしたリヤマサーレスは、朽ち果てた集落の残骸に強い衝撃を受けている。そしてその後、ポルマ・ダムをテーマとした 3 つの作品を順次発表した。「シナリオ」、「児童書」、「小説」とスタイルは異なっているが、いずれもテーマは「ダム建設による故郷喪失」である。ところが、このようにダムをテーマとして扱いながら、いっぽうで「生まれてすぐに引っ越したのでベガミアン村の記憶はない」と述べるなど、自身の故郷喪失体験にセンチメンタルな共感を寄せられることを嫌っている。本発表では、ポルマ・ダムによって故郷を離れざるを得なかった人々に関心を寄せながら、個人的な繋がりが注目されることに抵抗を示している理由を探るために、三作目の「小説」、*Distintas formas de mirar el agua* (2008) を取り上げてその分析を試みる。この作品は十六人の異なる視点から構成される物語で、その出版に際してリヤマサーレスは、“これはダムに飲みこまれた故郷について尋ね続けた読者と批評家への回答”だと述べている。この発言を手掛かりに、十六人の視点の中に託された作者の回答を考察する。

10 月 12 日 (土) 【文化】

Sábado, 12 de octubre 【Cultura】

スペイン領アメリカにおけるサンティアゴ
—ヌエバ・エスパーニャ副王領の地名を中心に—
Santiago en América: el caso de los topónimos novohispanos

井上幸孝 (Yukitaka INOUE)

大航海時代の到来以降、広大なスペイン領を成したアメリカ大陸を中心とする諸地域では、しばしばスペイン語の地名があらたに付けられた。本報告は、そのうちサンティアゴ (聖ヤコブ) という地名に着目し、ヌエバ・エスパーニャ副王領を対象としてこの地名が各地に付けられるに至った歴史的経緯を明らかにするものである。

最初に、西欧による「発見地」の地名を命名する際の傾向についてまとめた上で、メキシコに関する既存の研究をもとにサンティアゴの地名がどの程度の広がりを見せたのかを概観する。続いて、ヌエバ・エスパーニャ副王領においてサンティアゴという地名が与えられた歴史的経緯について考察を行う。

まず、サンティアゴという地名が付けられた経緯として一般にイメージされるのは、征服者や入植者の聖ヤコブ信仰との関連からサンティアゴという地名が名付けられたケースであろう。具体的には、征服者が新たな町を創設する際に、サンティアゴと命名した場合である。本報告では、メキシコ中央高原の都市ケレタロ (Santiago Querétaro) と中米征服におけるグアテマラ市 (Santiago de los Caballeros de Guatemala) の事例を検討し、これらの事例において、聖ヤコブの奇跡的出現や当時のスペイン人との聖ヤコブ信仰がどのように反映されたのかを考察する。さらに、本報告では、これらのケースとは違った歴史的経緯によってサンティアゴという地名が生じた場合があることも指摘する。先住民を対象とした集住化 (コングレガシオン) 政策に伴う守護聖人の決定により、サンティアゴが先住民村落の地名とされた場合である。そこで、集住化とそれに伴うキリスト教布教のプロセスを掘り下げ、サンティアゴ地名の偏在の理由、聖人信仰が根強く定着することになった要因について検討を行う。

10 月 12 日 (土) 【文化】

Sábado, 12 de octubre 【Cultura】

メネンデス・ペラーヨとアラビスタ達
- スペインにおける近代アラビア学の系譜 -

Menéndez Pelayo y los arabistas
- una genealogía de estudios arábigos modernos en España-

関 智彦 (Tomohiko SEKI)

12 世紀前半から 13 世紀末にかけて、トレド翻訳学校においてアラビア人が哲学や神学に関するウマイヤ朝以降の原語資料を俗語に翻訳し、ヨーロッパに広めた経緯により、近代のスペイン思想史学においてアラビア学は大きな重要性を占めていた。19 世紀から 20 世紀の著名なアラビスタとしてフリアン・リベラ・イ・タラゴア (1858-1934、以下フリアン・リベラ) やミゲル・アシン・パラシオス (1871-1944、以下アシン)、ラモン・メネンデス・ピダル (1869-1968、以下ピダル) が挙げられる。著しい業績を上げたこれらのアラビア学者のうち、後二者は精神史分野におけるスペインの碩学マルセリーノ・メネンデス・ペラーヨ (1856-1912、以下ペラーヨ) の指導をマドリッド大学にて受けた。中でもアシンはフリアン・リベラのイスラム思想研究を継承し、研究の方向性においてペラーヨの影響を強く受け、アヴィセナ (980-1037) やアルガゼル (1058-1111) といったイスラム哲学者の教義の解釈を中心とする研究を行った。

ペラーヨ自身もイスラム思想の研究に強い関心を持っていた。『スペイン異端者史』(1880-1882) に見て取れるように、彼は敬虔なカトリックでありつつもスペイン固有の思想潮流とその史的脈絡における異端者の重要性を主張していた。同著第二巻においては多くの章をキリスト教思想に対するイスラム・ユダヤ哲学の影響関係に割いており、スペイン思想史におけるセム哲学の影響に強い関心を示していたことが分かる。この関心はペラーヨとアシンの間で交わされた書簡以外に、アシンとフリアン・リベラの間で交わされた書簡にも強く反映されている。

それを受け、本発表ではペラーヨとアラビスタの書簡、著作における引用および言及を分析し、近代スペインのアラビア学の学風や系譜、その史学的意義を考察したい。

10 月 13 日 (日) 【言語】

Domingo, 13 de octubre 【Lingüística】

黄金世紀散文作品の計量文献学的分析

Análisis estilométrico de prosas del Siglo de Oro

川崎義史 (Yoshifumi KAWASAKI)

発表者は、『贋作ドン・キホーテ』(1614 年) や『贋作グスマン・デ・アルファラチェ』(1602 年) などの作者不詳の作品の真の作者を計量文献学的に同定する研究を行なっている。計量文献学 (Stylometry) は著者推定 (Authorship Attribution) と呼ばれ、真の作者が不明もしくは疑念が持たれている作品の作者を計量的手法により推定する研究分野である。計量文献学的研究により、英語ではシェークスピアや『ザ・フェデラリスト・ペーパーズ』、日本語では『源氏物語』や井原西鶴などの作品について、新たな知見が得られている。スペイン語の散文作品を対象とした研究も存在するが、高頻度単語の割合に注目する段階に留まっている。

本発表では、上述の研究の一環として、品詞 n-gram に基づいて黄金世紀の散文作品の計量的分析を行う。品詞 n-gram とは、n 個の品詞の連続パターンである。品詞レベルでの単語連続は、非意識的に生じるため作者の癖が現れやすく、他人による模倣が困難であり、作者識別の手掛かりとなりうる。品詞 n-gram の有効性は、日本語の著者推定において確認されている。管見の限り、品詞 n-gram に注目してスペイン語の文学作品を分析した先行研究は存在しない。分析対象は、『ドン・キホーテ』(1605 年, 1615 年), 『模範小説集』(1613 年), 『グスマン・デ・アルファラチェ』(1599 年, 1604 年), 『悪女フステイーナ』(1605 年), 『従士マルコス・デ・オブレゴンの生涯』(1618 年), 『ぺてん師の生涯』(1626 年) などの、作者が確定している作品である。品詞 n-gram 頻度を特徴量とし、クラスタリングや主成分分析などの多変量解析を行うことで、かなりの程度、作者の識別ができることが確認された。

10 月 13 日 (日) 【言語】

Domingo, 13 de octubre 【Lingüística】

擬似連結動詞としての *ir* と *go* に関する対照研究

Un estudio contrastivo sobre *ir* y *go* como verbo pseudo-copulativo

蔦原亮 (Ryo TSUTAHARA)

一部の自動詞は属詞と共に用いられる際に *ser* のような連結動詞に類似したはたらきをする： e.j. *Últimamente ando triste*. この用法では動詞本来の意味の大半が失われるが、アスペクトやムードに関する意味的価値は部分的に保たれている。このことから、この用法における自動詞は擬似連結動詞と呼ばれ、純然たる連結動詞と区別される。

本発表では密接な対応関係にあると考えられる *ir* と英語動詞 *go* の擬似連結動詞としての用法を比較・対照し、擬似連結動詞としての両者は全く異なる性質を有することを示す。それぞれの擬似連結動詞と高い頻度で共起する属詞を *eseu/en TenTen* コーパスから抽出、分析したところ、*ir* の典型的用法は主語がプラスの状態にあることを表すものであり、一方の *go* の典型性は主語の望ましくない状態への移行を表すことにあることがわかった。

分析によれば *ir* が特に高い頻度で共起する属詞は *genial, perfecto, fenomenal, tranquilo* 等である。これらの属詞がそうであるように、*ir* と高い頻度で共起する属詞の多くは好ましい状態、性質を表す。そしてこうした属詞との共起では *ir* は主語が持つ性質や、主語のおかれた状態を表す。

一方、*go* の典型的な属詞は *wrong, crazy, bankrupt, wild, extinct* 等であることが確認された。このように、*go* の特徴的な属詞は望ましくない状態を表すものである。そして、こうした共起において *go* が表すのはそうした状態への移行である (*go wrong*: 間違ふ、悪くなる/*悪い)。この点においても両者は異なる。

コーパスからは *ir* が状態変化を表しているケースが少数確認されたが、スペイン語においてこうした属詞とコロケーションをなすのは *salir, volverse* である。*Go* もまた、状態変化ではなく、主語のおかれた状態を表すことがある。しかし、それは一部の例外を除けば、*unnoticed* や *unpunished* といった「*un* + 過去分詞」という構造の属詞と共起した際に限られる。こうした特定の状態に至っていないことを表す属詞とコロケーションを形成するのはスペイン語では多くの場合 *ir* ではなく *pasar* である (e.j. *pasar inadvertido*)。

コーパス

Kilgarriff, Adam. (et al.). *European Spanish Web Corpus 2011*. (Words 2,021,633,644).

https://the.sketchengine.co.uk/bonito/run.cgi/first_form?corpname=preloaded/es

TenTen11_freeling_v4_virt;align=. (6/2019). (*eseu TenTen*).

---. *English Web Corpus 2015*. (Words 15,703,895,409).

https://old.sketchengine.co.uk/corpus/corp_info?corpname=preloaded/ententen15_tt21&struct_attr_stats=1&subcorpora=1. (6/2019). (*en TenTen*).

10 月 13 日 (日) 【言語】

Domingo, 13 de octubre 【Lingüística】

Se me construction の意味機能

—通時的・類型論的観点から—

Significado y función de la construcción "se me" desde el punto de vista diacrónico y tipológico

和佐敦子 (Atsuko WASA)

スペイン語の接辞 **se** は様々な動詞と結びつき、広範な意味を表すことが知られている。特に、次のように利害の与格 **me** を付加した構文は "**se me construction**" と呼ばれ、通時的観点からも興味深い研究が行われてきた (Melis & Flores 2012)。

(1) Se me rompió el vaso.

(2) Se me murió mi padre.

(1)のように他動詞 **romper** に「接辞 **se**+利害の与格 **me**」を付加した構文は、事態の予期せぬ生起 (**unexpectedness**)を表すとされ、(2)のように自動詞 **morir** に「接辞 **se**+利害の与格 **me**」を付加した構文は、日本語の「被害受身」と呼ばれる受動構文に対応するとされている。しかし、これらの構文の意味機能については、従来の研究において十分に明らかにされているとは言えない。

本発表では、"**se me construction**"は中動態構文 (**middle voice construction**) から文法化した構文であると捉え、通時的・類型論的観点から、その創発プロセスを考察する。そして、(1)(2)のような "**se me construction**"は、話者のコントロールの効かない自然発生的な事態生起を中動態マーカ―**se** で表し、事態と不可分の話者の関与を利害の与格 **me** で示すことによって、非意図性や喪失感などのモダリティを表すことを主張する。

10 月 13 日 (日) 【言語／パネル】

Domingo, 13 de octubre 【Lingüística/Panel】

Más allá del pensamiento monolingüe: Debates críticos sobre identidades, ideologías y políticas lingüísticas desde las lenguas minorizadas del mundo hispanohablante

モノリンガル思想を超えて：スペイン語圏の少数言語から見た言語的アイデンティティ・イデオロギー・政策に関する批判的討論

パネリスト Panelistas

Aingeru AROZ

Mamoru FUJITA

Takeshi KAKIHARA

Nobuyuki TSUKAHARA

Nuestra forma de comprender las identidades y prácticas lingüísticas en sociedades multilingües ha cambiado de manera notable en los últimos años. El interés por la “superdiversidad” lingüística de las sociedades contemporáneas (Blommaert, 2010; Vertovec, 2007), una mayor atención hacia las prácticas lingüísticas propias y distintivas de los hablantes multilingües (Canagarajah, 2013; García & Wei, 2014; Jørgensen, Karrebæk, Madsen, & Møller, 2011; Pennycook & Otsuji, 2015), la progresiva sofisticación en el análisis etnográfico de las identidades e ideologías lingüísticas de los hablantes de lenguas minorizadas (Durstón & Mannheim, 2018; Heller, 2011; Woolard, 2016) y el creciente grado de complejidad de los estudios sobre la cuestión de poder y autoridad entre los idiomas indígenas relativamente grandes de América Latina (Durstón & Mannheim eds., 2018) han abierto nuevas perspectivas desde las que analizar de una manera crítica los usos del lenguaje en sociedades multilingües.

Tomando como punto de partida estas tendencias teóricas, este panel tiene como objetivo abrir un debate crítico sobre (1) las experiencias e identidades de los hablantes de lenguas minorizadas en el mundo hispanohablante y (2) la forma en que las políticas lingüísticas interactúan con la diversidad de prácticas lingüísticas de las personas que usan estas lenguas. El panel aspira a inaugurar un foro de discusión académica y crítica en el ámbito de los estudios hispánicos en Japón, un nuevo espacio crítico dedicado a la comprensión y debate acerca de la realidad sociolingüística de las sociedades multilingües en el mundo hispano, con especial atención hacia las lenguas minorizadas y sus hablantes.

- Blommaert, Jan. (2010). *The Sociolinguistics of Globalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Canagarajah, Suresh. (2013). *Translingual Practice: Global Englishes and Cosmopolitan Relations*. Oxon: Routledge.
- Durston, Alan, & Mannheim (Eds.). (2018). *Indigenous Languages, Politics, and Authority in Latin America: Historical and Ethnographic Perspectives*. Notre Dame: University of Notre Dame.
- García, Ofelia, & Wei, Li. (2014). *Translanguaging: Language, Bilingualism and Education*. New York: Palgrave Macmillan.
- Heller, Monica. (2011). *Paths to Post-Nationalism: A Critical Ethnography of Language and Identity*. New York: Oxford University Press.
- Jørgensen, J. Normann, Karrebæk, Martha Sif, Madsen, Lian Malai, & Møller, Janus Spindler. (2011). Polylinguaging in Superdiversity. *Diversities*, 13(2), 23-37.
- Pennycook, Alastair, & Otsuji, Emi. (2015). *Metrolingualism: Language in the city*. Oxon: Routledge.
- Vertovec, Steven. (2007). Super-diversity and its implications. *Ethnic and Racial Studies*, 30(6), 1024-1054.
- Woolard, Kathryn A. (2016). *Singular and Plural: Ideologies of Linguistic Authority in 21st Century Catalonia*. New York: Oxford University Press.

10 月 13 日 (日) 【文学】

Domingo, 13 de octubre 【Literatura】

ラファエル・アルベルティの『説教と住処』における言葉の役割についての考察
En torno a Sermones y moradas de Rafael Alberti: las funciones de las palabras en el poema

川添 誠 (Makoto KAWAZOE)

ラファエル・アルベルティ (Rafael Alberti, 1902-1999) の『説教と住処』 *Sermones y moradas* と題された一連の詩群は 1929 年から 1930 年にかけて執筆され、1934 年の『詩集』 *Poesía 1924-1930* において初めて出版された。1928 年以降のアルベルティに関しては、1929 年に出版された『天使たちについて』 *Sobre los ángeles 1927-1928* をはじめとして、シュルレアリスムとの関連をめぐって数多く議論されてきたが、特にその傾向が最も顕著だとされる作品が『説教と住処』である。スペインにおけるシュルレアリスムに関しては、これまでに、韻律からの脱却や自動記述、宗教的側面など多くの観点から分析されてきたが、現代から改めて作品を考察する上で重視すべきは、その作品がシュルレアリスムであるか否かを断定することではなく、1920 年代後半の不安定な時期において、フランスをはじめとしたヨーロッパの影響を直接的あるいは間接的に受けつつ、スペインの伝統を評価した各詩人がどのように詩法を発展させたのかという点である。

画家を志していたアルベルティは、1920 年代に入ると詩人へと転向して作品を執筆し、やがて、自らシュルレアリスムを標榜することなく言葉の可能性を探求するようになった。『天使たちについて』においては、言葉の不完全性が追求され、一見不条理に思われる言葉の並びによって、詩全体や詩連ごとの意味よりも、次々と繰り出される言葉のつながり自体に重点を置く詩法が拓かれた。『説教と住処』においてこの傾向はより先鋭化し、韻律から解放された詩は、一文が非常に長い独白、あるいは説教のような形式を取るようになった。語と語の関連を論理的に理解することは困難であり、積み重なる言葉の意味ではなく、言葉の連なり自体の中にのみ真実があるような詩がここに樹立されるのである。

本稿では、アルベルティが 1920 年代を通して詩における言葉をどのように模索してきたのかを改めて確認しつつ、『説教と住処』において言葉がどのような役割を果たしているのかについて考察を行う。

10 月 13 日 (日) 【文学】

Domingo, 13 de octubre 【Literatura】

フランシスコ・デ・ケベドの「シルバス」の変容と詩論
La poética en la evolución de las Silvas de Francisco de Quevedo

田邊まどか (Madoka TANABE)

フランシスコ・デ・ケベド (1580-1645) は、1600 年代の半ばから 1610 年代の半ばにかけて一連の詩作品を書いた。これらの作品は「シルバ」と名づけられ、作者のイタリア滞在中にまとめられて「ナポリ手稿」および「エボラ手稿」として残っている。ケベドの詩作品では珍しく、制作年代がある程度特定できる作品群である。

この時期ケベドは高貴なジャンルに属する詩の時代に合致した形式を模索しており、道徳的テーマを扱って教養的な韻律を使用する一連の「シルバ」はそれを実現するものとして書かれたことがうかがえる。したがって、詩についての論考を残さなかったケベドにとって理想的な詩はどのようなものであったかをこの作品群から探ることが期待できるのである。

この作品のいくつかには 1603 年のアンソロジーに発表されたものもあり、また、ケベドはその後これらの作品の加筆・修正を続けたようで、没後 1648 年に出版された『スペインのバルナソ』では大きく異なっている作品もある。本発表では、1603 年および 1610 年代の二つの手稿と『バルナソ』のバージョンを比較することによって、改変にどのような傾向があるか見る。特に 1603 年と 1610 年代の比較によってケベドの詩論の再現を図ると同時に、その後の修正ではゴンゴラなど同時代の詩人からの影響を受けながらどのように詩の理想形を発展させていったかを明らかにしたい。

10 月 13 日 (日) 【文化】

Domingo, 13 de octubre 【Cultura】

Estudio preliminar acerca de la visión de un misionero vasco de Guam (1914-1970):
descripción de la fuente

バスク人宣教師のグアム観についての研究序説：史料解説

長瀬由美 (Yumi NAGASE)

En el presente abordamos un estudio preliminar, descriptivo y estadístico, sobre la fuente conservada en el Archivo de los Capuchinos de Navarra (Pamplona), que corresponde a la documentación referida a un capuchino misionero vasco, Miguel Ángel Olano Urteaga, obispo de Guam, que abarca desde 1914 hasta 1970

En concreto la documentación refleja el desarrollo de la vida de este misionero capuchino, desde la Primera Guerra Mundial hasta el fallecimiento de este, quien llega a gobernar la Iglesia de la isla como el último obispo español que la guió durante la difícil época de la Segunda Guerra Mundial y tuvo que sobrevivir a la presión de los dueños de la isla en la época que tratamos: Estados Unidos y Japón.

Partiremos del contexto histórico del aceleramiento de fenómeno misional español desde el estallido de la Primera Guerra Mundial con la neutralidad española y la derrota de Alemania y los imperios centrales, en el que es publicada la magna encíclica “Maximum Illud” de Benedicto XV en 1919, momento oportuno de la conclusión de la guerra mundial. Por entonces, la labor misional española ya estaba en su plena madurez. En dicha encíclica se proclamó fundamentalmente la necesidad de una separación radical entre el colonialismo y la expansión misionera.

A la vez, tendremos en cuenta lo característico de la fuente misional, cuya visión alcanza un profundo conocimiento del país y su pueblo, ya que todo lo que precisan los misioneros está destinado a la conversión del alma, lo cual conlleva ser necesario obtener una información exhaustiva y comprensiva, de modo diferente al que informan los viajeros y simples novelistas. Además, viniendo de un obispo, lo que acaba transmitiéndose puede resultar definitivo para la dirección de la labor pastoral del pueblo de destino, y acaba influyendo en la suerte de la política internacional en torno a este.

Así que, de acuerdo con dicha característica de la fuente misional, creemos imprescindible un estudio objetivo-estadístico de la misma, por lo que creamos las categorías de análisis, primero cuantitativo según la forma que tiene cada fuente, y segundo, cualitativo según la temática del contenido de cada una.

10 月 13 日 (日) 【文化】

Domingo, 13 de octubre 【Cultura】

Educando sobre el patrimonio arqueológico en el Perú:
Un análisis desde una escuela pública en el distrito de La Molina, Lima
ペルーにおける考古学遺産の教育について
ーリマ市ラ・モリーナ区にある学校の事例に基づく分析ー

Disner GUTARRA

Perú es un país lleno de contrastes, algo que se hace mucho más evidente cuando hablamos de “patrimonio arqueológico”. Por un lado, encontramos a personas que quieren obtener un beneficio directo de aquellos objetos que tienen valor histórico, ya sea que los hubiesen hallado casualmente o mediante la práctica del “huaqueo” (excavación ilegal de sitios arqueológicos); mientras que, por otro lado, hay gente que quiere conservar el patrimonio y defenderlo. Dentro de este espectro, sin embargo, tenemos que, para aquellas personas que no están especializadas en temas de arqueología, hay varios conceptos importantes relacionados a esta ciencia que se usan a diario y que no están del todo claros. Por ejemplo, el concepto de “patrimonio arqueológico” es un término frecuentemente usado al hablar de sitios u objetos arqueológicos y su protección, pero poca gente puede definir por qué es importante o cómo se debe conservar. Se suele asumir que este desconocimiento deviene de la falta de información en estos temas, lo cual recalca la importancia de la educación a todo nivel sobre el patrimonio arqueológico.

Mucho se ha discutido en Perú sobre la necesidad de incluir el tema del patrimonio arqueológico en la currícula para formar ciudadanos que puedan entender su valor y protegerlo, considerando la gran cantidad y calidad de los restos arqueológicos que existen en este país. Sin embargo, se han dado pocas investigaciones sobre cómo estos conocimientos se imparten realmente en las escuelas. El presente estudio se centra en analizar el contexto socioeducativo de la enseñanza del patrimonio arqueológico en el Perú. Para ello, el autor ha realizado una temporada de campo en un colegio público del distrito de La Molina, en Lima, Perú. Este colegio fue elegido porque se ubica colindante con el sitio arqueológico Huaca Melgarejo, que viene siendo estudiado por el Programa de Arqueología Pública Huacas de La Molina, del cual el autor es miembro, y además porque el interés de este distrito en temas educativos facilita el acceso a la información y la interacción con los docentes. En esta ponencia presentaremos los resultados preliminares de la primera temporada de campo, donde pudimos observar las prioridades que los maestros dan a los temas de arqueología y su forma de trabajar los contenidos.

10 月 13 日 (日) 【文化】

Domingo, 13 de octubre 【Cultura】

日本における日系ペルー人の社会的流動性を克服するための障壁としての特異性
La Idiosincrasia como una barrera para superar la movilidad social de los Nikkei Peruanos en Japón

Jakeline LAGONES

本研究は、日本に居住する第一世代と第二世代の日系ペルー人のケーススタディを通して、2 世代に渡る日系ペルー人の生涯における達成を分析し、それを定性的に調査した知見を述べている。本研究の目的は、日系ペルー人が本研究の調査結果に帰する経済的、教育的および社会的な意味を精査する定性的な知見の重要性を記述および分析することである。本研究では 2 つの仮説を導く。1 つ目は、日系ペルー人を形作ってきた彼らの社会における特異性、誇り、文化的先入観および社会階級区分が、日本での生活に大きく影響を与える可能性があること。2 つ目は、日本におけるブルーカラー労働者（肉体労働者）としての日系生活と社会的流動性を達成することの困難さが、彼らの子供たちが日本で成功を収めるために彼ら自身を元気づけていること。本研究では、日本に住んでいる日系ペルー人とのインタビューとケーススタディの分析を通して、彼らの定性的な視点が得られている。本研究は、多くのペルー人が住み、仕事をしている地方と都会の環境を拠点とした。その結果、次の 2 点を示す。第一に、日本への最初のデカセギ移住の間、日系ペルー人は日本語、文化、習慣、社会的ルールなどの多くの障壁を克服しなければならなかった。最も困難な障壁は、彼らが出身国から得てきた彼らの誇り、先入観および習慣に関係していた。第二の結果は、第二世代の工場労働者と非工場労働者の間に著しい差が存在していることであった。それは、第一世代の特異性が、第二世代に与えた影響であった。それゆえ、日本の社会における若い第二世代の社会的流動性を高めることはより困難になる。

10 月 13 日 (日) 【文化】

Domingo, 13 de octubre 【Cultura】

ラテンアメリカにおける「舞踏」(Butoh)の受容をめぐって
El Butoh en América Latina

吉川恵美子 (Emiko YOSHIKAWA)

第二次世界大戦後の日本で新しく生まれた「舞踏」はコンテンポラリー・ダンスと演劇のあいだに位置すると言われる舞台芸術である。日本では一般的に認知度が低い、ラテンアメリカのアーティストの間では広く知られ、非常に高い評価を受けている。「舞踏」がどのような経緯でラテンアメリカに伝わり、なぜ、注目を浴びるようになったのかを考えてみたい。

「舞踏」は土方巽(1928-86)と大野一雄(によって創始された。このうち大野一雄と子息の大野慶人、そしてその弟子たちはたびたびラテンアメリカに招かれて公演をおこなってきた。白塗りの身体が独特の表現をおこなう難解な「舞踏」の何が彼らを引き付けたのだろうか。ラテンアメリカのアーティストたちは、言葉ではなく身体で語るこの新しい舞台芸術に日本の古典芸能との関連性を見出すだけでなく、グロトフスキーに代表されるヨーロッパの身体表現の系譜を読み取ろうとする。そうしたアプローチを可能にするラテンアメリカの表現芸術に対する視座を探してみたい。現在、ラテンアメリカと接点を持ちながら活躍している日本の「舞踏」ダンサーの証言も交えて報告したい。